

# エックハルトの初期ドイツ語著作『教導講話』における 「放念」(gelâzenheit)

阿部善彦

## アブストラクト

『教導講話』(*Rede der unterscheidung*, 1294-1298年頃)は、エックハルト(Meister Eckhart, 1260頃-1329年)の最初のドイツ語著作である。「放念」(gelâzenheit)は、「離脱」、「突破」と並び、エックハルトの中心思想である。『教導講話』は「放念」の思想が最初に示された著作であるが、これまで研究の空白地帯となっていた。そのため、本研究では、『教導講話』に焦点を絞って「放念」思想を考察する。まず、「放念」という言葉の由来、その聖書的、神秘思想的脈絡を確認する。次に、『教導講話』における「放念」思想の、聖書的背景、ドミニコ会修道霊性との関係を考察する。その上で、「放念」の意義を、自己認識および我意の吟味と放棄の観点から明らかにするとともに、「放念」思想とエックハルト独特の宗教的生の思想である「はたらきの中の霊性」との関係を考察する。

## はじめに

「放念」(gelâzenheit)は、エックハルト(Meister Eckhart)の「ドイツ語著作」、「ドイツ語説教」において、繰り返し取り上げられる重要概念である。「放念」の思想が最初に示されたのは、彼の最初のドイツ語著作『教導講話』(*Rede der unterscheidung*)である<sup>1</sup>。だが、『教導講話』における「放念」の思想は、これまで十分に研究されてきたとは言えない。その理由としては、『教導講話』それ自体が、他のエックハルトの著作に比べて、これまで十分な研究が進められてこなかった研究事情を指摘することできる。『教導講話』は、エックハルトが、エアフルト修道院長時代に書いた著作である(1294-1298年頃)。これまでのエックハルト研究では、『教導講話』は修道院的著作であり、エックハルトの神学的・哲学

---

1. 以下、エックハルトの著作は次の原典による。*Die deutschen und lateinischen Werke*, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungsgemeinschaft, Stuttgart: W. Kohlhammer, 1936 ff. (以下全集と表記)。引用表記については、基本的に、全集版で行なわれている表記、略記の方式に従う。ただし、以下、本文中の『教導講話』(全集ドイツ語著作第五巻に収載)からの引用箇所は、題目略記(RdU)、頁(S.)を省略し、頁数のみを()内に表記する。本稿における『教導講話』の訳出においては、次の邦訳文献を参照した。『神の慰めの書』、相原信作訳、講談社、1985年、講談社。「エックハルトI」、植田兼義訳、教文館、1989年、(キリスト教神秘主義著作集6巻)。「エックハルト論述集」、川崎幸夫訳、創文社、1991年、(ドイツ神秘主義叢書、上田閑照、川崎幸夫編)。

的思弁性が展開されていないと評価され、十分に研究が進められてこなかった<sup>2</sup>。

また、「放念」思想の研究においても、『教導講話』における「放念」の用例が、その最初の用例として引き合いに出されるとしても、本格的な思想内容の解明は、『教導講話』ではなく、「ドイツ語説教 12」などの別の著作に基づいて行われてきた。なぜなら、「ドイツ語説教 12」で、エックハルトは、「放念」の最たるものを「神のために神を放ちすてる」と述べる。「人間が放ちすてるものとして、最高にして究極のものは、神のために神を放ちすてることである」(Pr. 12, DW I, S. 196)。従来の研究では、ここにエックハルト独特の「放念」思想の核心があるとされた。だが、初期著作である『教導講話』では、同様の表現は見出されない。こうしたことから、『教導講話』における「放念」の思想は、それ自体として十分に主題的に取り上げられてこなかった<sup>3</sup>。

そのため、本研究では、エックハルトが「放念」の思想を最初に明らかにした『教導講話』に焦点をしばり、それが『教導講話』で論じられるどのような問題と関わっていたのか考えてみたい。そして、本研究の一連の考察を通じて、『教導講話』における「放念」思想の誕生の場面に、われわれの理解を近づけることを試みたい。

### 1.1 「放念」という言葉の由来—聖書、神秘思想的脈絡

まず、「放念」という言葉について簡単に見てゆくことにしたい。「放念」(gelâzenheit)は、放ちすてることを意味する中高ドイツ語の動詞形、“lâzen”、“gelâzen”に由来する。“lâzen”、“gelâzen”という語を見るならば、それらを宗教的文脈において用いているのは、エックハルトが最初であるのではない。このドイツ語の表現は、エックハルトに先立って、ドイツの女性神秘家、マグデブルクのメヒティルト (Mechthild von Magdeburg, 1208 頃 - 1282/97 年) に見出される。彼女のドイツ語による霊的著作『神性の流れ出る光』のうちに、次のような用例が確認されている。「全ての人々は、純粋な心で、神への愛のために、すべての事物を放ちすてる」(Alle, die mit luterm herzen allu ding lassent dur gottes liebîn : *Das fließende Licht der Gottheit*, hrsg. von Hans Newmann, Bd. I, 1990, VII, 64)<sup>4</sup>。

- 
2. これまでのエックハルト研究の状況については次の拙論を参照。「エックハルトの初期ドイツ語著作『教導講話』について」、『カトリック研究』、上智大学神学部、第79号、2010年、123-159頁、(阿部2010)。また、エックハルトの生涯と著作については次の拙論を参照。「ドミニコ会士としてのマイスター・エックハルト」、『理想』、第683号、「特集 中世哲学」、理想社、2009年、94-108頁。「ドミニコ会教育体制とエックハルト」、『日本カトリック神学会誌』、日本カトリック神学会、第21号、2010年、127-149頁。
  3. 「放念」に関する主要研究としては次のものを参照。Adeltrud Bundschuh, *Die Bedeutung von gelassen und die Bedeutung der Gelassenheit in den deutschen Werken Meister Eckharts unter Berücksichtigung seiner lateinischen Schriften*, Peter Lang, Frankfurt a. M., Bern, New York, Paris, 1990, (Bundschuh 1990). Alois. M. Haas, *Kunst rechter Gelassenheit. Themen und Schwerpunkte von Heinrich Seuses Mystik*, Peter Lang, 1996, (Haas 1996). Erik A. Panzig, *Gelâzenheit und Abegescheidenheit – Eine Einführung in das theologische Denken des Meister Eckhart*, Evangelische Verlagsanstalt, 2005, Leipzig, (Panzig 2005).
  4. Vgl. Ludwig Völker, *Die Terminologie der mystischen Bereitschaft in Meister Eckharts deutschen Predigten und Traktaten*, Giessen, 1964, (Völker 1964), S. 81.

こうした表現は、聖書の言葉から成立したと考えられている。聖書の中で、ペトロがイエスに対して、「わたしたちはすべてを放ちすてました：nos reliquimus omnia」(マタ 19:27)と述べている。ここで、放ちすてる(見放す、うちすてる、あきらめる)ことを意味するラテン語、“reliquere”がドイツ語に訳される際、“lâzen”、“gelâzen”という言葉が用いられた<sup>5</sup>。こうした聖書の背景とともに、“lâzen”、“gelâzen”は、神に対する自己放棄、所有放棄を意味する霊的表現として受け入れられたと考えられる<sup>6</sup>。

「放念」が最初に用いられた『教導講話』においても、同じく、福音書のペトロの言葉(マタ 19:27) — 「ごらんください。主よ。わたしたちはすべてをすてました：sich, herre, wir hân alliu dinc gelâzen」(196) — が引用され、そこから、「放念」の思想が語られている。

## 1.2 『教導講話』における「放念」—修道霊性(従順)との関わり

次に、『教導講話』における「放念」の思想が、どのような文脈において語られているか確認しておきたい。

『教導講話』は、修道院長であるエックハルトが、「子ら」すなわち、若いドミニコ会士に向けられた講話を成立場面としている<sup>7</sup>。それゆえ、その第一章は、「従順」(gehôrsame)から説き起こされる。「従順」は、修道者が立てる三つの誓願のうちの一つであり、修道生活に入る者は、「従順」のほかに、「清貧」、「貞潔」の三つの誓願を立てる。ドミニコ会の修道霊性では、三つの誓願のうち、「従順」が最も重要なものであるとされた<sup>8</sup>。『教導講話』も、第一章は次の言葉で始まっている。

「真実の、そして完全な従順は、あらゆる徳の中の徳である。そして、この従順の徳なしには、いかなる大いなるはたらきも生じないし、行われえないのである」(185)。

「放念」が語られる『教導講話』第三章では、「従順」が、「キリストに従う」という観点

5. Panzig 2005, S. 57-58; Völker 1964, S. 80. 聖書の中で“reliquere”の用例箇所として参照すべき箇所としては、次のものが挙げられる。“relictis retibus secuti”(Mt. 4:20). “reliquimus omnia”(Mt. 19:27). “omnis qui reliquerit”(Mt. 19:29). エックハルトの“reliquere”の解釈については「ラテン語説教 53」(LW, IV, Serm. n. 524) 参照。

6. エックハルトは、「放ちすてること」(lâzen, gelâzen)を根本語とした、「放念」(gelâzenheit)という言葉がドイツ語史上はじめて用いた。だが、そのとき、この言葉を聞いた人たちには、すでに先人によって“lâzen”、“gelâzen”という言葉のうちに込められてきた霊的・宗教的意味が共有されていたと考えられる。ただし、エックハルトは、「放念」を通じて、福音書に示される「神に対する自己放棄、所有放棄」の意味そのものを、さらに徹底的に探究していった。そうして、最終的には、「放念」の本質を、「神のために神を放ちすてる」という究極的な思想表現とともにとらえている。その意味で、エックハルトは、「放念」を最初に用いただけでなく、それを透徹した思索によって解明した最初の思想家として高く評価されるべきであろう。Bundschuh 1990, S. 107-110. Haas 1996, S. 249.

7. 『教導講話』の成立背景となる修道霊性との関係性については次の拙論を参照。阿部 2010。「エックハルトの『教導講話』—成立背景となる修道霊性の伝統について」、『日本カトリック神学会誌』、第 22 号、日本カトリック神学会、2011 年、289-210 頁、(阿部 2011a)。

8. 「従順」に関するドミニコ会修道霊性の伝統については上掲拙論のほか、次の拙論を参照。「エックハルトの『教導講話』とその人間像—「信頼」、「愛」、「罪」、「悔悛」をめぐって—」、『研究論叢』、星美学園短期大学、第 43 号、2011 年、13-39 頁、(阿部 2011b)。

から論じられる。そこでは聖書箇所（マタ 16:24）に基づいて次のように述べられている。

「だれであれ、わたしに従おうとする人は、まずはじめに、自己自身を否定しなければならない： *swer mir welle nâchvolgen, der verzihe sich sîn selbes ze dem êrsten*」(196)<sup>9</sup>。

こうして、ここで「従順」は、自らと自らのものを捨ててキリストに従った、使徒たちの「キリストに倣い従う」(nâchvolgen<sup>10</sup>)、完徳的な生き方に重ね合わせられ、その核心に「自己否定」が見出されている<sup>11</sup>。そして、「放念」は、「自己否定」から始まる「従順」、「キリストに倣い従う」生き方を明らかにするために語られている。エックハルトは次のように述べている。

「あなた自身を認識しなさい。あなたがあなた自身を見出すところで、あなた自身を放ちすてなさい。そしてこのことが最も善いことなのである： *Nim dîn selbes war, und swâ dû dich vindest, dâ lâz dich ; daz ist daz aller beste*」(196)。

### 1.3 「放念」—「自己認識」に基づく「我意」の放棄

直前の引用にあるように、「放念」では、自己自身を認識することが要求される。自己認識無しには、自己自身を「放ちすてる」(lâzen) ことはできない。自己自身を根本的に否むためには、否む自己自身にとって、否定される自己自身が何か知られていなければならない。逆説的な言い方になるが、自己自身を徹底的に否むためには、自己自身と徹底的に一つとなっていなければならない<sup>12</sup>。

では、自己自身を認識し、自己自身を放ちすてるとはどのようなことであろうか。エックハルトは、そこで「我意」(eigener wille) を指摘する。「我意」を捨てることが自己を放ちすてることである。これは「従順」の思想にも適合する。「従順」は、自己の意志を放棄して、神の意志と一致することだからである<sup>13</sup>。

「我意」とは、「調和秩序にそぐわないあり方」(unordenliche)、「妨げ」(hindernisse)、「不和对立」(unvrîde) の原因となるものである。エックハルトは次のように述べている。

---

9. 福音書の同箇所では、ラテン語文によれば次のように書かれている。「そこでイエスは、ご自分の弟子たちに言われた。もし、わたしの後について行きたいのであれば、自分自身を否定し、自分の十字架を受け取り、わたしに従うように」(マタ 16:24)。そのほか、マコ 8:34、ルカ 9:23 参照。

10. この言葉は、キリスト教思想史的概念である「キリストに倣う」(imitatio Christi) という言葉を著す現代ドイツ語の“Nachfolge Christi”に通じる言葉である。『教導講話』における“Nachfolge Christi”のテーマについては次の拙論を参照。『エックハルト研究—初期ドイツ語著作『教導講話』における宗教的生の探究構造』、学位論文、2010年度、上智大学、博士(哲学)、第四章。また次の論文が公刊予定。「エックハルトの『教導講話』におけるキリスト教的修行論—《模範》に基づく宗教的生の完成と《個人》の多様性の緊張関係」、『研究論叢』、星美学園短期大学、第44号、2012年3月公刊予定。

11. ドミニコ会における「使徒的生」(vita apostolica) の模範と、ドミニコ会修道霊性、「従順」との関係については、阿部 2011b、15-20 頁参照。

12. このことは、「ラテン語説教 37」の中でも次のように言い表されている。「自己を否定することにおいて、自己自身に不可分であること： *in se indivisus abnegatione sui*」(Serm. n. 375)。

13. 阿部 2011b、21-23 頁参照。

「[不和对立：unvríde をもたらすもの]、それは我意である。あなたはそのことを認めないか、思い当たらないだけである。我意からくるのでなければ、不和对立があなたのうちに場を得ることはないであろう。…ほかならぬ事物のうちにおいて、あなたが、あなたを妨げているものなのである。というのも、あなたがあなた自身を調和秩序にそぐわないあり方で事物の中にまもっているのである。それゆえ、まずはじめに、あなた自身からはじめなさい、そして、あなた自身を放ちすてなさい。真理において、まずはじめに、あなたがあなた自身から逃れ去るのでなければ、あなたが他のどこに逃れ去ろうとも、あなたはそこで妨げと不和对立を見出す。それ「妨げと不和对立」は、それがあるところ「あなた自身、我意」にある」(192-193)。

この引用箇所では、「まずはじめに」(ze dem êrsten)という言葉が繰り返し述べられている。「まずはじめに」(ze dem êrsten)という言葉によって、自己自身を認識し、自己を放ちすてる「放念」が、我意をすて、神の意志に一致する「従順」に貫かれた宗教的生活の最初にあるべきことが明確にされる。

さらに、ここで述べられる「放念」の思想は、「従順」だけでなく、人間の所有的関係における我意の放棄、自己否定の意味も持つ。エックハルトは次のように述べている。

「人は、まずはじめに、自分自身を放ちすてるべきであり、そのようにして、その人は一切の事物を放ちすてたのである。真理において、一人の人が王国や一切世界を放ちすてたとしても、自己自身を保っているならば、その人は何ものも放ちすてなかったことになる。そうであるから、人が自分自身を放ちすてるのであれば、その時、その人が保っているものが何であれ、富や名誉やそのようなものであるとしても、その人は一切の事物を放ちすてたことになるのである」(194)。

エックハルトはこの引用箇所に関連して、次の聖句(マタ5:3)、「精神の貧しい者たちは幸いである：sælic sint die armen des geistes」(195)を引用している。エックハルトによれば、精神の貧しさとは、意志の貧しさ、つまり我意の放棄である<sup>14</sup>。その意味で、「放念」は、「従順」とともに、「清貧」の完全性にも不可欠なものと考えられる。

## 2.1 「放念」の実践—宗教的熱意や宗教的善良さに対する自己吟味

以上の考察を通じて、「放念」の思想が、「従順」や「清貧」を実現する、自己認識に基づく自己否定、我意の放棄、自己所有の放棄の実践として語られていることを確認した。では、そうした我意の放棄である「放念」の実践は、どのように行われるのか。エックハルトは、そこで、断食や苦行など、具体的で外的な実践について積極的に言及していない。むしろ、すでに見たように、自己認識と自己否定という、自己自身のうちに向かう内的な実践として

14. エックハルトは“armen des geistes”の後に続けて、「それは意志の[貧しさである]: daz ist des willen」(195)と述べている。



それは一貫して語られる。

『教導講話』では、そうした自己自身に向かう内的実践は、自己自身のうちにある宗教的熱意や宗教的善良さに対する自己吟味を行うことによって開始される。エックハルトは『教導講話』の中で、そうした自己吟味のまなごしを開くように人々を導いてゆく。こうした自己吟味への招きにおいて、『教導講話』での宗教的生の探究における、エックハルト独特の視点と洞察が特徴的に現れていると思われる。エックハルトは、第三章の冒頭で次のように述べている。

「人々は次のように言う。『ああ、主よ。わたしは次のように望みます。わたしにも、他の人々が保持しているような神とのよい関係にあることや、神に対する敬虔さ、平安調和をえられるように、と。そして、わたしにも、他の人々と同じようなあり方や、または、貧しくあることがあるように』、と。または、『わたしがこれこれの場所にあることや、かくかくのことは行うのではないならば、わたしには決して正しいあり方が生じないでしょう。わたしは異郷や、岩屋や、修道院にいなければならないのです』、と」(191-192)。

エックハルトが、この冒頭に提示している「人々」の訴えは、決して悪意に基づいたものではない。この訴えは、むしろ、神に対する熱意や、真剣な宗教的生活への意欲から生じている。興味深いことに、エックハルトは、一見して素直な宗教的善良さや熱意として受け取られる、これらの訴えを手がかりにして、我意の問題を取り上げる。自ら自身のうちに沸き起こる宗教的善良さや熱意において、自らの意志のあり方を改めて吟味する。そこに、我意の徹底的な克服が目指されるのである。

## 2.2 宗教的熱意や宗教的善良さに対する自己吟味の意味

もちろん、先の訴えに見られるような宗教的善良さや熱意そのものを、エックハルトはあしきものとみなしているのではない。宗教的善良さや熱意は、人々の宗教的生活と切り離しがたく結びついている。それだけに、そのうちにひそむ我意に対する十分な吟味がなされず、見過ごされ、容易に宗教的生活の中に持ち込まれてしまうおそれがある。

このような宗教的善良さの中にも見出される我意の吟味の必要性は、その後の「ドイツ語説教」においても繰り返し取り上げられている。ここでは、その中でも、よく知られている「ドイツ語説教1」を見ておくことにしたい。そこでは、当該聖句(マタ21:12)の中で、イエスによって神殿から追い出されるものとして、「両替商」とともに登場する「鳩を売っていたものたち」について、次のように述べられている。

「さらに、わたしは次のことをしばしば語った。わたしたちの主は、鳩を売っていた人々たちに向かい、『それをとりのぞき、ここから持ってゆきなさい』、と言った。これらの人々たちを主は追い出したり、激しく叱責したのではない。そうではなく、まったく好意ある仕方、『それをとりのぞきなさい』と言ったのである。それはあたかも、主が次のように言いたいかのようにであった。それは悪いものではないのだが、しかし、純粋な真理において妨げをも

たらずものなのである、と。これらの人々は、全く善良な人々である。彼らは自分のはたらきを純粹に神のために行うのである。そして、彼ら自身のものをそこに求めていないのである。しかし、彼らは我意性とともにはたらくのであり、時間、数、前、後とともにはたらくのである。それらのはたらきにおいて、彼らはまったく最善の真理から妨げられるのである。そのため、彼らは自由でとらわれ無くあらねばならない。それは、わたしたちの主イエス・キリストが自由でとらわれ無くあるようにである。主はご自身をいかなる時も、新しく、絶えることなく、時間を超えて、ご自分の天におられる父から受けとられるのである」(Pr. 1, DW I, S. 10-11)。

まず、注目すべきことは、「わたしは次のことをしばしば語った」と述べられていることである。このことからして、それは、おそらく、エックハルト自身が頻繁に主題化していた問題に関わっていたと考えることができる。その問題とは、各人の宗教的生をかたちづくる宗教的善良さや熱意ともいべきものの中に含まれている、我意の吟味の必要性に関するものであろう。

ここで、エックハルトは、鳩を売る人々について述べている。すなわち、鳩は神へささげられるものであり、両替という代価を求める取引と異なり、鳩をあつかうことそれ自体が悪であるとは考えられていない。この箇所では、鳩をあつかうことは、「自分のはたらきを神のために行うこと」であるとさえ理解されている。

しかし、エックハルトはそこに「真理」からわれわれを妨げるものを見出す。「真理」とは、ここでは、「わたしたちの主イエス・キリスト」自身のうちに実現されているあり方であり、キリストを通じてわれわれに明らかにされ、われわれにひらきもたらされた、「父」との関係において生きる新しい生命の連関のことである。

鳩をあつかう者が指し示す宗教的な善良さは、この「真理」に対して十分なものではない。なぜなら、そこには、キリストのうちに実現していた「自由でとらわれ無くある」というあり方が実現されていないからである。「自由でとらわれ無くある」というあり方は、「父」との関係からのみ自らのあり方を受けとることである。

そうしたあり方は、自らの自己同一性を、まったく世界的、時間的連関から保持しない。むしろ、そうした連関が切断されるところで、自らのあり方をえる。「いかなる時も、新しく、絶えることなく、時間を超えて」と述べられているように、非連続的であり、かつ不断に刷新的な生命の連関の中に自らのあり方を得るのである。

しかし、ここで述べられる宗教的善良さは、自らもまた、こうした「自由でとらわれ無くある」、世界的、時間的連関の切断の自覚にいたっていない。非連続的であり、かつ不断に刷新的な生命の連関の中に自らのあり方を得るにいたっていない。キリストを通じて示される、こうした「真理」に対して、善良な人々を妨げているものとは、究極的には、彼らを宗教的に善良なものとしているところの、彼らの善良さ、彼らの善意の中にひそむ我意からもたらされるはたらきである。

それゆえに、宗教的な善良さは、キリストにおいて示される「真理」、「自由でとらわれ無くある」あり方に向けて、そこに我意がないか、吟味されなければならない。そうした吟味を通じて、「自由でとらわれ無くある」あり方へといたらないならば、彼らのはたらきが、そこで述べられていたように、「自分のはたらきを神のために行う」というほどに善良なものであったとしても、世界的、時間的連関の中に彼らをとどめてしまう。そのような我意の吟味なしでは、「彼ら自身のものをそこに求めていない」と述べられるほどに没頭する熱心ささえも、キリストにおいて示される「真理」、「自由でとらわれ無くある」あり方から、彼らを遠ざけ、妨げてしまうのである。

ここで述べられていた「我意性」(eigenschaft)とは、さらに、次のことを意味している。「我意性」は、ここでは、「時間、数、前、後」とともに述べられる。「我意性」は、これらと同じく、それら自体がただちに悪、もしくは、悪意あるものであるとされるのではない。「我意性」とは、「鳩」が象徴的に示唆しているように、善良な人々がそれぞれ各自で抱く善い計画や目的意識でもある。だが、それは「時間、数、前、後」という世界的、時間的連関の連続性や計算可能性のなかにとらえられたもの、とらわれたものになっている。そして、そのことが看破される時、自らを中心にして、それまでの経緯やこれからの展望という時間的連関の中に、自らの抱く善い計画や目的を計算すること自体が、彼らを「自由でとらわれ無くある」あり方、世界的、時間的連関の切断の自覚、非連続的であり、かつ不断に刷新的な生命の連関から、遠ざけていることが明らかになるのである。

### 2.3 『教導講話』における「我意」の診断方法

このように宗教的善良さや熱意の後ろに隠れている「我意」の問題性は、初期著作の『教導講話』第三章においてすでに見通されていた。エックハルトは、そこで、これと同じように、宗教的な善良さに基づく様々な訴えの言葉そのもののなかに、未だ吟味されず克服されていない「我意」を診断している。エックハルトは、『教導講話』において、先に引用した「人々」の訴えに続けて、次のように述べている。

「真理において、このことはまったくあなた自身のことなのである。そして、決してそれ以外のことではないのである。それは我意である。あなたはそのことを認めないか、思い当たらないだけである。我意からくるのでなければ、不対立があなたのうちに場を得ることはないであろう。わたしたちが念頭においているものは何であるかと言えば、人がこのことから逃れなければいけないとか、あのことを求めなければならないということである。それはつまり、場所、人々、生き方、量、はたらきのことであるが、このことが、生き方や事物があなたを妨げることの責めを負っているのではないのである。ほかならぬ事物のうちにおいて、あなたが、あなたを妨げているものなのである。というのも、あなたがあなた自身を調和秩序にそぐわないあり方で事物の中にまもっているのである。それゆえ、まずはじめに、あなた自身からはじめなさい、そして、あなた自身を放ちすてなさい。真理において、まず



はじめに、あなたがあなた自身から逃れ去るのでなければ、あなたが他のどこに逃れ去ろうとも、あなたはそこで妨げと不和对立を見出す。それ〔妨げと不和对立〕は、それがあるところ〔あなた自身、我意〕にある」(192-193)。

エックハルトは、往々にして「我意」の問題が十分に自覚されえないものであることを念頭においている。だが、宗教的善良さや熱意から発せられるような様々な希望や訴えは、未だ吟味されず克服されていない「我意」の存在をほのめかしている。エックハルトは、それを、「このことから逃れなければいけないとか、あのことを求めなければならない」というような訴えとともに顕在化する「不和对立」(unvride)、「調和にそぐわないあり方」(unordenliche)を通じて指摘する。

「このことから逃れなければいけないとか、あのことを求めなければならない」という訴えは、自らの現在の状況を不十分、不満足なもののみなし、新しい状況の中により完全なものを求めようとしている。そのような訴えは、現在の自分自身の状態と、あるべき自分自身の状態との間にある不協和音的な「不和对立」を顕在化させている。「我意からくるのであれば、不和对立があなたのうちに場を得ることはないであろう」と述べられているように、それは自己自身に由来するものである。だが、たとえ、それが自己に対する不満足の表明にすぎないとしても、そこには、一定の自己理解がすでに含まれているのであり、「放念」へと到達するために必要とされる、重要な自己認識の契機がそこに潜んでいることをエックハルトは見逃さない。

そうした自己認識、我意の認識の契機は、「このことから逃れなければいけないとか、あのことを求めなければならない」というような訴えによって覆い隠されてしまう。そうして、われわれは、動揺不安をもたらす「不和对立」の中に潜んでいる重要な自己認識の契機を看過し、「不和对立」をもたらす「我意」を十分に自覚することなく、「あなたが、あなたを妨げているものなのである」と指摘されるまで、その自己認識に到達することができない。

動揺不安をもたらす「不和对立」から、「このことから逃れなければいけないとか、あのことを求めなければならない」というような訴えに向かうことで、われわれの精神のまなざしは、それ以上自己自身に向かうことをやめ、自己自身をとりまく外的な関係性へとそれてしまうのである。そのような有限的事柄のうちに「平安調和」を求めようとする限り、それがいかなる事柄であるとしても決して「平安調和」を見出すことはない(193)。それは、探し方そのものが「正しくない」(unrechte)のであり、歩むべき「道」(weg)を見誤っているので、「行けば行くほどますます彷徨う」ことになるのである(194)。

以上の考察を踏まえるならば、『教導講話』第三章において、自己自身を認識し、自己自身を放ちすてることとして述べられていた「放念」とは、つまり、一切の問題の根源にある「我意」を見分け、それを放棄することであると言える。また、「我意」を見分けるためには、自らの宗教的善良さや熱意までも、「我意」を覆い隠しうるものとして、厳しく吟味されねばならない。こうした徹底的な自己吟味が要求されている背景には、「はたらきの中の霊性」

とも言うべき、エックハルト独特の宗教的生の理解が密接に関わっていると考えられる。本稿の考察の最後に、この点について簡潔に述べておくことにしたい。

### 3. 「放念」と「はたらきの中の靈性」

エックハルトは、『教導講話』第六章で次のように述べている。

「わたしは次のように問い求められた。ある人々は、自らを人々のあいだから厳しく引き下がらせ、まったくよろこんで独りである。そして、彼らの平安調和はそこにかかっている。そして、また彼らは教会の中にいることをよろこんでいる。はたして、このことが最も善いことなのでしょうか、と。わたしは、そこでこう言った。否、と。なぜであるか、注意してもらいたい。真理において、ある人に対して正しいことが成り立つならば、その人がすべての場所において、すべての人々とともにいても、正しいことが成り立つ。しかし、ある人に対して正しくないことが成り立つならば、その人がすべての場所において、すべての人々とともにいても、正しくないことが成り立つ。然るに、ある人に対して正しいことが成り立つならば、その人は、真理において、彼とともに神をもっているのである。さらに、真理において、神を正しくもっている人は、神を、すべての場所において、街道においても、すべての人々とともにいても、教会にしようが、荒野にしようが、僧房にしようが、同じように、もつのである」(200-201)。

エックハルトは、ここで、「独りである」ことや「教会の中にいる」という、外的関係性を媒介として神をとらえようとする方法そのものに「否」を突きつけている。それゆえ、エックハルト自身がその後で述べているように、「教会は街道よりも高貴な場所である：ein edelrius stat diu kirche dan diu strâze」(203) のであり、「独りである」ことや「教会の中にいる」ことを悪であるとはしない。それら自体は、神を求める人にとって望ましいあり方でもある。だが、外的条件にとらわれている限り、最も内的で根源的な神との関係性に到達できていない。それゆえに、たとえ宗教的善良さや熱意に由来するようなものであっても、外的条件に左右されない、ゆるぎない神との関係に至るためには、一切が吟味されなければならない。そうすることで—「ドイツ語説教1」の表現に沿って言えば—神以外のあらゆるものが、神の神殿である心から取り除かれねばならない。その中でも、『教導講話』において述べられているように、「我意」は、自己と神以外の外的、有限的事柄とを固着させる根本の原因であり、何よりも「我意」を見分け、放ちすてる「放念」が求められるのである。そして、そこから、いつ、いかなるときも、他者とともにありながら、神とゆるぎない関係性に生きる、「はたらきの中の靈性」が可能となる<sup>15</sup>。

「はたらきの中の靈性」は『教導講話』の中心テーマである。当時、修道院長エックハルト

15. 「はたらきの中の靈性」および、それに関するドミニコ会修道靈性における「活動的生」の理解については阿部2011a、198-204頁参照。

トと修道士たちは、発展した商業都市エアフルトに生きていたのであり、都市に暮らす人々とともにある日常が、彼らの霊性の場であり、そうならねばならなかったのである<sup>16</sup>。エックハルトは、次のように述べている。

「あなたが教会の中や僧房の中にあるときに、あなたがどのようにあなたの神を思っているのか、注意しなさい。そして、その同じ心を保って、それを群集のもとでも、喧騒の中でも、不安定な状態の中でも、持ち運びなさい」(203)。

『教導講話』は、当時、発展した商業都市エアフルトにおいて、都市に暮らす人々とともに生きた、修道院長エックハルトと修道士たちの霊的修練のドキュメントであると見ることのできる<sup>17</sup>。エックハルトは次のように述べている。

「人間は、今、この生涯において、いかなるはたらき無しにすまずことはできないのであり、そのはたらきは人間にふさわしいことであり、そして、はたらきには多様なものがあるのである。それゆえに、人間は、自らの神を、あらゆる事柄においてもしっかりとらえて、いかなるはたらきにあっても妨げなくとどまり、立っていられるように、学ばなければならないのである」(211)。

われわれは、地上に生きるものであり、地上に生きるものである限り、必ず、地上においてははたらくということを利用して生きることはできない。このような人間存在に対する根本的な洞察にしたがって、あらゆる状況にあっても、外的条件に左右されない、徹底的な神との一致のうちに生きる、「はたらきの中の霊性」が求められるのである。そして、「放念」をはじめ、「離脱」、「突破」などのエックハルトの中心思想は、この初期著作の中で、「はたらきの中の霊性」との密接な関係とともに誕生したのである。『教導講話』における、これらの中心思想の誕生を、「はたらきの中の霊性」との関わりから明らかにするためには、『教導講話』第六章、第十章、第二十一章のテキスト解釈が重要となると考えられる。この点については、また稿を改め、別の機会に論じることにはしたい。

16. エアフルトをはじめ都市市民社会におけるドミニコ会霊性については次の研究を参照。香田芳樹「『主は人間の中で、人間とともに住まうことを喜び給う』—マイスター・エックハルトの思想形成と都市市民社会—」、岡部雄三 香田芳樹 編『ドイツにおける神秘思想の展開』(日本独文学会研究叢書 35: 日本独文学会 発行、2005年)、17-34 頁。Yoshiki Koda, "Mystische Lebenslehre zwischen Kloster und Stadt. Meister Eckharts 'Reden der Unterweisung' und die spätmittelalterliche Lebenswirklichkeit", in *Mittelalterliche Literatur im Lebenszusammenhang. Ergebnisse des Troisième Cycle Romand 1994*, Freiburg, Schweiz, 1997, S. 225-264, (Koda 1997).

17. エアフルトにおける同時期のドミニコ会の課題は、次の言葉によって示されうる。"die <Symbiose> mit dem Stadtbürgertum" (Koda 1997, S. 231).

